

## 気仙沼大学ネットワーク——被災地における大学プラットフォームの構築

Kesennuma University Network——Construction of a University Platform in Devastated Areas

一ノ瀬友博  
Tomohiro Ichinose

慶應義塾大学環境情報学部教授 / 1968年生まれ。東京大学農学部卒業。同大学大学院農学生命科学研究科博士課程修了。博士(農学)。  
景観生態学、景観計画学、農村計画学。著書に『農村イノベーション』ほか。日本造園学会賞、村尾育英会学術賞などを受賞

東日本大震災によって、1,300人以上の死者行方不明者を出した宮城県気仙沼市は、宮城県と岩手県の県境にあり、漁業と水産加工業で知られている。津波とその後発生した火災による被害が甚大で、七十七銀行の試算によれば市の総生産の約半分を失ったとされている。市内には、大学等の高等教育機関は存在しない。しかし、被災後は日本各地から数多くの大学がさまざまなかたちで支援をしてきている。慶應義塾大学湘南藤沢キャンパスで、学生たちと気仙沼復興プロジェクトを立ち上げた筆者もそのうちのひとりである。この気仙沼市において、大学間をつなぐプラットフォームとして、気仙沼大学ネットワークが立ち上がったので、ここで報告したい。

### 検討の経緯

筆者は、気仙沼市出身の清水健佑君(プロジェクトの学生リーダー)が研究室に所属していて、彼の実家の家業も大きな被害を受けたことから、2011年3月末に気仙沼復興プロジェクトを立ち上げることにした。震災からちょうど1カ月の時点で、教員、学生の合計8名で気仙沼市に入ることができ、市役所を訪問した。幸運なことに、菅原茂市長、加藤慶太副市長と面談することができ、被災状況と今後の復興について意見交換をした。そのときに、印象的であったのは、すでに数多くの大学関係者が気仙沼市を訪れているということであった。そして、その大学は、必ずしも宮城県の大学ではなく、首都圏や関西圏からの来訪ということであった。県庁所在地である仙台から最も遠い気仙沼市で、地元大学が存在しないこともその理由だったかもしれない。

筆者らは月に1~2回のペースで被災地に入りさまざまな活動をしてきたが、夏前ごろには次第にいろいろな大学の活動の様子を漏れ聞くようになってきた。同じような地域で活動する大学があっても、同じ学会に所属していなければ、直接連絡を取る手段がなかった。そして、被災地の住民の方からは、同じようなヒアリングを異なる大学からもされたと言われるようになった。そのころか

ら、ボランティア団体をつなぐボランティアセンターのように、被災地で支援を行う大学をつなぐプラットフォームの必要性を感じるようになった。

転機となったのは、11月下旬に筆者も企画にかかわった講演会に菅原市長にお越しいただき、大学間のプラットフォームについて意見交換したことだった。菅原市長からは、夏休みが終わってから被災地に入る大学の数もぐっと減ってきたこともあって、今後の効果的な支援のためにも、プラットフォームに期待したいとの意見であった。同時期に、同じく被災地で支援活動を続けていた早稲田大学、東京大学の教員と、初めてお目にかかる機会があり、問題意識を共有することができた。そこで、12月上旬から人間関係やさまざまな手段を駆使して、気仙沼市で活動する大学の教職員、学生の情報を収集し始め、中旬にはプラットフォームの立ち上げについてお知らせし、メーリングリストをスタートさせた。

### 気仙沼大学ネットワークの発足

2012年1月10日に気仙沼市内で、第1回準備会を開催した。この会には、小野寺五典衆議院議員、菅原市長、加藤副市長が出席し、8大学の大学関係者が集まった(図1)。会議の様子は、Ustream中継し、さらに数大学の関係者が議論に参加した。この会議で、プラットフォームの名称を「気仙沼大学ネットワーク」とすることを決定した。2月27日には、仙台市の東北工業大学一番町ロビーで第2回準備会を行い、正式に気仙沼大学ネットワークを発足させた。ネットワークの目的は、気仙沼市内で活動する大学の情報共有と発信、さらには共同して行える支援活動の実施とした。1月中旬の時点で、各大学の活動状況を発信するためのFaceBookページ(<http://www.facebook.com/KesennumaUniv.Network>)を立ち上げていたが、ネット上の情報に触れることのできない被災者に向けた情報発信方法を真剣に考えるべきだという意見もあって、次に述べる各大学の合同展示会を企画することになった。また、大学がつながったからこそできる支援に対する期



図1 | 第1回準備会の様子  
[撮影：緒方伊久磨(慶應義塾大学)]



図2 | 気仙沼市民会館における展示会の様子  
[撮影：清水健佑(慶應義塾大学)]



図3 | 出展されたプロジェクトの活動場所

待も多くの関係者から表明された。加えて、気仙沼大学ネットワークの動きには、気仙沼市の市民、出身者、各種支援団体や企業からも関心が寄せられ、それらの人々もオブザーバーとして加わっていただくことになった。3月下旬現在で、33大学、12の支援団体や企業、そして、市役所から約100名のメンバーが集まっている。

### 気仙沼市における合同展示会

3月10日から17日まで、気仙沼市民会館において、気仙沼大学ネットワーク主催の合同展示会を行った(図2)。大学に加え、NPO団体や企業からの参加もあり、合計27の展示がなされた。会場には、8日間で300人を超える来訪者があった。それぞれのプロジェクトのタイトルと代表者の所属と氏名は以下のとおりである。なお、敬称は略させていただきます。

- ・唐桑わかめ小屋(千葉大学 秋谷卓希)
- ・海と山とワタシの弁当(青山学院大学 黒石いずみ)
- ・気仙沼まちなか三町復興まちづくり(早稲田大学 阿部俊彦)
- ・鮎立港まちづくり百年会(東京大学 太田浩史)
- ・小泉地区の挑戦 住民発案の集団移転(北海道大学 森傑)
- ・みんなの集まる場所 鹿折復興マルシェ(近畿大学 脇田祥尚)
- ・仮設住宅地をみんなのまちへ(近畿大学 脇田祥尚)
- ・面瀬地区コミュニティ支援ほか(中央大学 中澤秀雄)
- ・唐桑町大沢地区における防災集団移転事業のサポート活動(横浜市立大学 鈴木伸治)
- ・気仙沼を世界と結んで、未来をつくる—プロジェクト(丸)—(東京大学 田村大)
- ・気仙沼復興プロジェクト(慶應義塾大学 一ノ瀬友博)
- ・哲人プロジェクト(慶應義塾大学 諏訪正樹)
- ・東北地方復興支援学生ボランティア(京都大学 佐藤真行)

- ・K-PROJECT 気仙沼南町および南町海岸復興プロジェクト(東北工業大学 猿渡学)
- ・気仙沼港・舞根湾における生物環境調査(首都大学東京 横山勝英)
- ・気仙沼復興支援ボランティア(早稲田大学 橋谷田雅志)
- ・大学間連携災害ボランティアネットワーク(明治学院大学 波多野洋行)
- ・唐桑 番屋プロジェクト(宮城大学 竹内泰)
- ・仮設住宅居住環境改善プロジェクト(京都工芸繊維大学 魚谷繁礼)
- ・東北学院大学災害ボランティアステーションの気仙沼ボランティア活動のご紹介(東北学院大学 其田雅美)
- ・津波流出家屋マッピングプロジェクト(立正大学 後藤真太郎)
- ・気仙沼—熊谷文化交流事業 一の谷嫩軍記・気仙沼公演(立正大学 後藤真太郎)
- ・(社)日本造園学会東日本大震災復興支援調査報告：気仙沼チーム(千葉大学 木下剛)
- ・「イキイキした持続可能なコミュニティ」：気仙沼から世界に違いを生み出そうプロジェクト！(クボタ 三木一弥)
- ・東日本大震災支援(Civic Force)
- ・緊急災害支援(日本国際民間協力会 工位夏子)
- ・もとよしボランティア連絡会(もとよしボランティア連絡会)

これらの各プロジェクトの活動場所を気仙沼市の衛星画像上に配置し(図3)、一目でわかるようにした。黄色が大学がかかわるプロジェクトで、青が大学以外の団体のプロジェクトである。もちろん、活動場所が各地にわたるプロジェクト支援活動もあるので、すべてを記載しているわけではないが、それぞれの活動の粗密が初めて明らかになった。

### 今後の展開

3月末には、気仙沼大学ネットワークに加わっている大学が連携しての教育支援プロジェクトが行われるなど、連携しての活動が早速始まりつつある。また、先の合同展示会がきっかけとなって、プロジェクト同士の交流も始まったようだ。5月以降には、市役所内に気仙沼大学ネットワークの活動拠点をご用意いただけることになっている。この拠点の活用方針はまだ決まっていないが、気仙沼市民と各大学関係者や支援団体の関係者をつなぐことで、大学間をもつなぐプラットフォームとして機能していればと考えている。さらには、この大学ネットワークを地域大学にまで発展させ、気仙沼の復興を支える知の集合体に発展させようという構想もある。海外からの研究者や専門家をもつなげるような大学ネットワークとなることを期待している。